

魔女の1ダース

新潮社

米原 万里

(¥500)

最初に本書よりなぞなぞ。サウジアラビアの王子様の1人が日本を訪れ、たまたま目にした車に心底ほれ込んでしまった。「豪奢で華やかで気品があって威厳がある。これぞ余が捜し求めていた理想の車じゃ」。王子はさっそくその車を買って求め、国で愛用しているという。確かに一切の先入観なしに見れば、王子の用いた形容は、この車にピッタリかもしれない。しかし普通の日本人ならこの車を乗り回す気には絶対にならない。さて、この車はなんでしょう。

この本の著者米原万里氏はロシア語通訳の旗手。著者は仕事柄、異文化に属する人同士の交流に立会い、その中でたびたび、ある文化圏で「正義」や「常識」とされていることが、異文化の価値観、発想法で脆くも崩れ去る現場を目撃してきている。そんな著者が講談社エッセイ賞を受賞した本書で一貫して主張しているテーマは「物事に絶対なんてことは絶対がない」ということである。そのことを「京都のベトナム人」や「イスタンブール

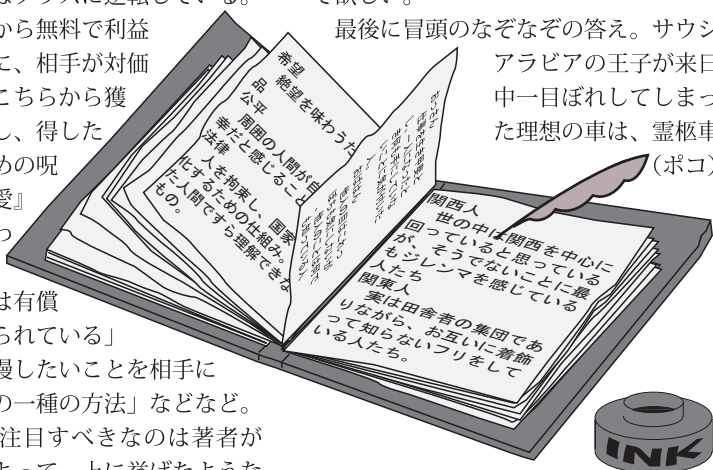
ールの日本人」などの身に起きたおもしろおかしくも示唆に富んだ出来事や抱腹絶倒(?)の駄洒落を例にひきながら、ユーモアたっぷりに描いている。たとえばロシアには「悪魔と魔女の辞典」なるものが存在する。そこでは「まっとうな」世界ではプラスイメージにつながる概念がマイナスに、マイナスイメージにつながる概念はプラスに逆転している。

「愛……相手から無料で利益を引き出すのに、相手が対価以上のものをこちらから獲得したと錯覚し、得したと思わせるための呪文。『無償の愛』という言葉がわざわざあるように、本来は有償なものと考えられている」

「謙遜……自慢したいことを相手に言わせるための一種の方法」などなど。さらに本書で注目すべきなのは著者が独特な感性によって、上に挙げたような

「違い」の中から、その先にある「人間だからこそその共通点」を、川から魚を鰭で突き刺すようにサッとすくい取っていることである。その様が、読んでいて非常に爽快で心地よい。この本を読んでいると「常識＝絶対」ではないこと、それでいて「人間根っこは同じ」だということを痛感させられる。ぜひ一度目を通して欲しい。

最後に冒頭のなぞなぞの答え。サウジアラビアの王子が来日中一目ぼれしてしまった理想の車は、霊柩車。(ポコ)



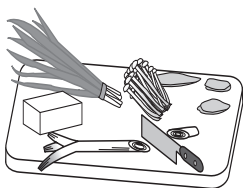
かんたん Cooking

キムチ鍋

冬といえば鍋。今回は誰にでも簡単に作れ、とってもおいしいキムチ鍋を紹介します。(雪)

材料 (4~5人分)

キムチ	500g
だしの素	小さじ4
水	800ml
酒	1/2カップ
胡椒	少々
醤油	大さじ1
ニラ	1/2束
長ネギ	1本
えのき	1パック
豆腐	1丁
豚ばら肉	200g
キムチの素	適量



①野菜、豚ばら肉、豆腐を食べやすい大きさに切る。なお、キムチが切れていない場合にはこの時点で切っておくとよい。



②鍋に水を張り、だしの素を加えスープを作る。醤油・酒・胡椒などの調味料を加え沸騰させる。



③鍋にキムチ・野菜・豚ばら肉・豆腐を入れる。煮えたら味を見て、辛さが足りないようならキムチの素を適量加え出来上がり。

はみだしすてーじ

昨年は、クリスマスに、独りでサンタのカッコして、独りでクリスマスを祝いました。楽しかった。
⇒自分が楽しいのが一番ですもんね。

(法・3 まっすんラヴ)
(そこまではふっ切れない; 編)